

笑い茸

野村胡堂

—

伽羅大^{きやら}尽磯屋^{いそや}貫兵衛の涼み船は、隅田川を漕^こぎ上つて、白鬚^{しらひげ}の少し上、川幅の広いところを^よ選つて、中流^{いかり}に碇をおろしました。わざと気取つた小型の屋形船の中は、念入りに酒が廻つて、この時もうハチ切れそうな騒ぎです。

「さア、皆んな見てくれ、こいつは七平の一世一代だ——おりん姐さん、鳴物^{なりもの}を頼むぜ」

笑い上戸^{じょうご}の七平は、尻^{しり}を端折ると、手拭をすつと冠^{かぶ}りに四十男^{はじ}の恥も外聞もなく踊り狂うのでした。

取巻の清五郎は、芸者のお袖を相手に、引つきりなしに拳^{けん}を打っておりまし

た。貫兵衛の義弟で一番若い菊次郎はそれを面白いような苦々しいような、形容のしようのない顔をして眺めております。

伽羅大尽の貫兵衛は、薄菊石の醜い顔を歪めて、腹の底から一座の空気を享樂している様子でした。三十五という脂の乗り切った男盛りを、親譲りの金があり過ぎて、呉服太物問屋の商売にも身が入らず、取巻末社を引きつれて、江戸中の盛り場を、この十年間飽きもせず押し廻って居る典型的なお大尽です。

「卯八、あの酒を持って来い」

大尽の貫兵衛が手を挙げると、

「へエ——」

爺やの卯八——その夜のお爛番——は、その頃は飛切り珍しかったギヤーマンの徳利を捧げて臚から現われました。

「さて皆の衆、聴いてくれ」

貫兵衛は徳利を爺やから受取って、物々しく見栄みえを切ります。

「やんややんや、お大尽のお言葉だ。皆んな静かにせい」

清五郎は真っ赤な顔を挙げて、七平の踊りとおりんの三味線を止めさせました。

「この中には、和蘭渡おらんだわたりの赤酒せきしゆがある。ほんの少しばかりだが、その味の良さというものは、本当にこれこそ天の美禄としがしらというものだろう。ほんの一杯ずつだが、皆んなにわけて進ぜたい。さア、年頭としがしらの七平から」

貫兵衛はそう言いながら、同じギヤーマンの腰高盃こしだかさかずきを取って、取巻の七平に差すのでした。

「有難きやうらいッ、伽羅大尽きやらの果報にあやかかってそれでは頂戴仕るとしまししょうか、——おつと散ります、散ります」

野幫間のだいこを家業のようのようにしている巴屋七平ともえやは、血ちのような赤酒あかを注つがせて、少し光沢つやのよくなった額ひたいを、ピタピタと叩たたくのです。

「次は清五郎」

これは主人と同年輩ざっばいの三十五六ですが、雑俳ざっばいも、小唄こたがも、嘘うそ八百も、仕方しかたなしも、音曲おんきょくもいける天才てんさい的な道楽だうらく指南しゆんぱん番ばんで、七平しちへいに劣おとらず伽羅大尽がらだいじんに喰くい下ががつております。

「へエ——オランダ渡わたりの葡萄ぶどうの酒しゆ。話わには聞きいたが、吞くむのは初はめて——それでは頂戴ちやうたいいたします、へエ——」

美しいお蔭かげにお酌しやくをさせて、ビードロの盃さかになみなみと注ついだ赤酒あか。唇くちびるまで持もって行いって、フト下したへ置おきました。

「何なにうした、清五郎」

少し不機嫌ふきげんな声こゑで、貫兵衛くわんべゑはとがめます。

「いえ、少し気になることが御座います」

「何んだ」

「あれを——気が付きませんか、橋場のあたりでしょう。闇の中に尾を引いて、ひとだま人魄が飛びましたよ」

「あれッ」

女三人は思わず悲鳴をあげました。

「おどかしてはいけない、多分四つ手駕籠ちようちんの提灯か何んかだろう」

と貫兵衛。

「そんな事かもわかりません、——ああ結構なお酒でございました、——もう一杯頂戴いたしましょうか」

清五郎は綺麗に呑み干した盃を、お蔦の前に突き付けるのです。

「それはいけない、酒にも人数にも限りがある。その次は菊次郎だ」

「そう仰しやらずにもう一杯、——頬つぺたが落ちそうですよ」

「いや、重ねてはいけない、それ」

貫兵衛が目配せめくばすると、お蔦は清五郎の手から盃をさらって、菊次郎のところに持って行きました。貫兵衛の義理の弟で三十前後、これは苦み走ったなかなか良い男です。

菊次郎もどうやら一杯呑みました。義兄が秘蔵ひぞうの赤酒は、こんな時でもなければ口に入りそうもありません。

続いて芸者のおりんとお袖、お蔦つたは呑む真似だけ。大方空からっぽになった徳利は、杯を添えて臚とものお爛番かんぼんのところに返されました。

二

「あ、お前は」

お爛番の卯八は飛付きました。が、その徳利を奪い取る前に、船頭の三吉は徳利の口を自分の口に当てて、少しばかり残って居た赤酒を、雫も残さず呑み干してしまつたのです。

「宜いつてことよ、今日は大役があるんだ。酒でも呑まなきや、仕事が出来るものか」

「でも、その酒を呑んじやいけないことがあつたんだ。仕様がねえなア」
「ケチケチ言いなさんなよ、酒の一本や二本、何んでえ」

船頭の三吉は、お爛番の卯八の文句もんくに取合う様子もありません。

それからの騒ぎが、どんなに悪魔的なものであつたか、たった一人素面しらふだつた、若い芸者のお蔭だけがよく知つて居ります。

一番先に狂態きょうたいを演じたのは、江崎屋えざきやの清五郎でした。

「ウ、ハツハツハツ、ハツ、ハツ、ハツ、こりや可笑しい、ハツハツハツ、ハツ」
腹を抱えて笑い出すと、その洞ろな笑いが、水を渡り闇を縫って、ケラケラケラと川面一パイに拡がって行きました。

それをきっかけのように、暫くのあいだ坐ったまま、顔の筋肉をムズムズ動かしていた巴屋の七平は、物に憑かれたように起き上がって、筋も節もなく踊り始めたのです。

続いて菊次郎——日頃賢そうに取澄ましているのが、膳を二三枚蹴飛ばすと、湧き上がるような怪奇な手振りで、ヒヨロリ、ヒヨロリと人の間を泳ぎ廻るのです。

年増芸者のおりんは、何やらわめき散らして、狭い船の中——杯盤の間を滅茶滅茶に転げ廻りました。日頃気取ってばかりいる中年増のお袖も、訳のわからぬ事を歌い続けながら、あられもない双肌腕もろはだぬぎになって、尻尾に火の付いた獣けものの

ように、船の中を飛び廻ります。

その中でも一番猛烈を極めたのは、船頭の三吉でした。口から泡を吹いて、酔眼すいがんをビードロのように据すえたまま、野猪のじしのように、艦ともから舳みよしへ、舳から艦へと、乱れ騒ぐ人間を掻きわけて飛び廻ります。

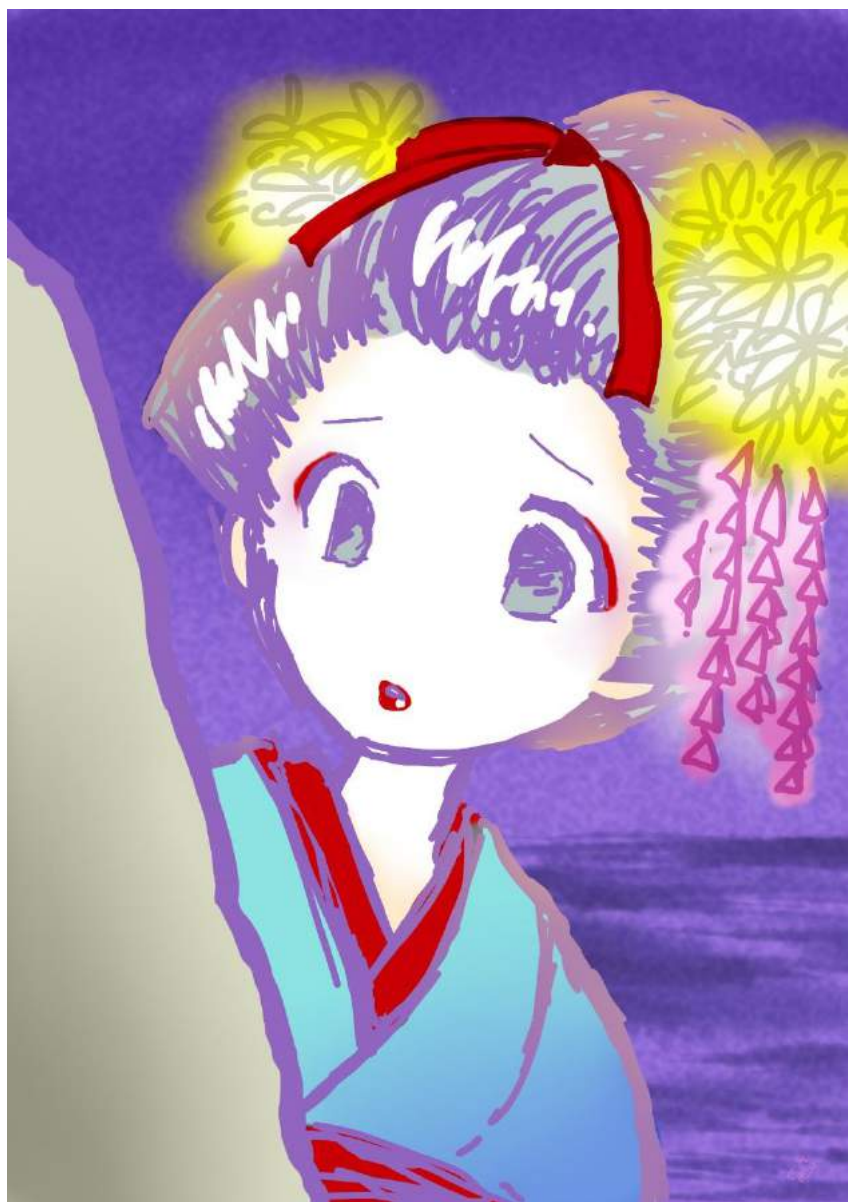
鎮しずまり返った隅田川の夜気を乱して、船の中には、一瞬しゆん気違い染みた旋風せんふうが捲き起ったのです。洞うつろな笑いと、訳の解らぬ絶叫と、滅茶滅茶にもつれ合う中を、六人の男女が狂態の限りを尽すのでした。(編注)

一番若くて、一番綺麗なお蔦つたは、颯風たいふうの眼のように移動する動乱うらちの渦さを避けて、お爛番かんばんの卯八の懐に飛込んだり、伽羅大尽きやらの貫兵衛うしろの背後に隠れたりしました。船はちょうど隅田川の真まん中に停とったまま、一寸も動く様子はありません。この動乱を避ける道は、夜の水より外にはないのでありますが、水心のないお蔦はさすがに其処へ飛込むほどの勇氣も無かったのでしょう。

「旦那、どうしたんでしよう、私は、私は怖い」

日頃は醜い蝦蟇がまかなんかのようみにくに思っていた貫兵衛も、今の場合は、たった一人の救いの神でした。ほとんど素面しらふで、艦とちもからこの狂態をジッと見詰めている貫兵衛の冷たい顔には不気味なうちにも、妙に自信らしいものがあつたのです。

「怖こわがることはないよ、あいつらは騒ぐことが好きなんだ、——あんなにゲラゲラ笑いながら、滅茶滅茶に踊り狂いながら、地獄の底まで道中するんだ」
貫兵衛の醜い顔は、悪魔的な冷笑ゆがに歪ゆがんで、六人の狂態を指した手は、激情ふるに顫ふるえます。



「助けてエー、旦那様」

お蔭は思わずすがり付いた袂たもとを離しました。冷静を装う貫兵衛の顔には、踊り狂う六人の顔よりも物凄いものがあつたのです。

その騒ぎの中から、船頭の三吉はヒヨロヒヨロと艦ともに戻りました。

「退どいてくれ、——俺は、大変なことを忘れていた」

片手業にお爛番かんぼんの卯八うをかき退けると、予かねて用意したらしい、木槌こづちを取つて、船底の栓せんを横なぐりに叩くのです。

「あッ」

お爛番の卯八は後ろから、その身体を羽交はがいじ締めにしました。ここで船底の栓などを抜かれたら、船の中の十人は、一とたまりもなく溺おぼれ死ぬことでしょう。

「止してくれ、——邪魔しやがると、手前てまえのガン首から先に抜くぞ」

いきり立つ三吉。

「頼むからそいつは止してくれ」

「何を言やがる」

振りもぎった三吉、もういちど槌つちは勢いよく振りあげられます。

その争いは一瞬にして片付きました。船頭の三吉が予かねて仕掛けをしてあったらしく、船底の栓が他愛たあいもなく抜けるのと、卯八の必死の力が、荒れ狂う三吉を舷ふなばたから川の中へ押し転がすのと、殆んど一緒だったのです。

ドツと奔騰ほんとうする水。

「あッ」

卯八は今抜き捨てた栓を捜しましたが、咄嗟とっさの間に三吉が川の中へ抛ほうり込んだものか、それは見当りません。自分の身体を持って行って、穴から奔注ほんちゅうする水を防ぎましたが、そんな事では、なんの役にも立たないことが、すぐ解つてしまいました。

船の中の狂乱は、一瞬毎にその旋回度せんかいどを増して、山水やまみずに空廻りする水車のよ
うな勢い。

「あッ、そうだ」

卯八は料理のために用意した出刃庖丁を取出すと、碇綱いかりづなをブツリと切りまし
た。あとは、艀ろに寄って、馴れないながら一と押し、二た押し。

水浸みずびたしになった涼み船は、それでも白鬚しらひげの方へ、少しずつ少しずつは動いて
行きます。

時々ドツとあがる笑い声、それも次第に納まって、乱舞も大方な凧ないだ頃、船
は向島の土手の下、三間ほどのところへズブズブと沈んでしまいました。

三

魂たましいの抜けたように、呆然ぼうぜんとしている貫兵衛うながを促し、か弱いながら、一番氣の確たしかなお蔭つたを手伝わせて、卯八一人の大働きで、水船から引上げた人間は五人、船頭の三吉と、野幫間のだいこの巴屋七平ともえやは、それっきり行方不知ゆくえしれずになってしまいましたた。

近所の船頭をかり集め、松明たいまつを振り照して川筋を捜しましたが、その晩はとうとう解らず、翌る日の朝になって、船頭三吉と、野幫間七平の死骸は、百本杭ぐいから浅ましい姿で引上げられました。

ところで、不思議なことに、呑む、打つ、買うの三道楽に身もちくずを持崩して、借金だらけな船頭三吉の死骸からは、腹巻の奥深く秘めた百両の小判が現れ、野幫間七平の死骸には、背後はいごから突き刺した凄まじい傷が見付かったのです。

「こんなわけだ、親分、行って見て下さい。前代未聞の騒ぎじゃありませんか」
ガラッ八の八五郎は、得意の早耳で、これだけの事を聞込んで来たのでした。

「そいつは御免蒙ごめんこうむろう、向島じゃ縄張り違ちがえだ」

銭形平次は相変あひらず引込み思案しあんです。

「縄張りの事を言や、三輪の万七親分ちんぶんだつて縄張り違ちがいでしよう」

「それが何うした」

「いきなり川を渡つて、現場をさんざん荒し抜いた上、柳橋に渡つて、お蔭つたを挙げて行きましたぜ」

「それが見込み違ちがえだといふのか」

と平次。

「お蔭かげは芸者家業かぎようこそしているが、親孝行で心掛こころかの良よい娘だ、人を殺すか、殺さねえか、親分」

「大層腹を立ててるようだが、誰かに頼まれて来たんじゃあるまいな、八」

「へエ——」

「誰だか知らないが、門口かどぐちで赤いものがチラチラするようだ、ここへ通すが宜い、——お静」

「はい」

女房のお静は心得て門口へ行った様子ですが、何やら押問答おしもんどうの末、モジモジする娘を一人、手を取らぬばかりに伴つれて来ました。

「お前さんは？」

平次も少し面喰めんくらいました。まだほんの十七八、身み扮なりは貧し気な木綿物ですが、この界限かいわいでも、あまり見かけた事のない良い娘こです。

「へッへッ、——お蔭の妹ですよ、親分」

ガラッ八は不意気に五本指で小鬢こびんなどを搔かいて居ります。

「早くそう言や宜いのに、——なんと言いなさるんだ」

「お絹さんてんだ、親分、——あっしの叔母さんの知合で」

ガラツ八はまだモジモジして居ります。

「お絹さんと言うのかい、——一体どうしたというんだ。皆んな話して見るが宜い。俺の力で及ぶことなら、何とかして上げよう」

銭形平次が、こう言うのは、全くよくよくのことでした。それだけ、このお絹という小娘は、好感の持てる娘だったのです。

油っ気のない髪、おしろい白粉も紅も知らぬ皮膚、山のはいった赤い帯、木綿物の地味な単衣、ひとえなに一つ取柄の無いようすですが、そのつくろわぬ身扮みなりにつつんだ、健康そうな肉体と、内気な純情とは、どんな人にでも、訴えずには措おかなかつたでしよう。

「姉を助けて下さい、親分さん」

「一体、どうしたのだ」

「姉は——たいこもち幫間の七平を怨うらんでいました。あの人がお袖さんに頼まれて、余計

な事を言い触らしたばかりに、菊次郎さんと切れてしまったんです」

「それで？」

「それで、七平を殺したのは、姉さんに違いない——つて、三輪の親分が言います」

「フーム」

「それから、昨夜舟ゆうべの中で、みんな気違いみたいになつたのに、姉だけ一人、平気でいたのが怪しいんですつて」

「それだけの事なら、お前の姉さんを下手人げしゅにんにするわけにはゆくまい。外に何んか手掛りがあるだろう」

三輪の万七ろうかいの老獪ろうかいさが、それだけの証拠でお蔭を縛らせる筈もありません。
「姉ちゃんは怪我けがをしていたんです」

「手首を切つて、ひどく血が出ていたんですつて」

「そんな事もあるだろう、——よしよし、俺が行つて覗いてやろう。親孝行で評判の良いお蔭が、人など殺せる道理はない、——八、一緒に行つて見るか」

「へエ——」

親分を引張り出したのは、自分の手柄だけではなかつたにしても、フェミニストの八五郎は、すっかり有頂天になつて、親分の草履ぞうりなど揃そろえております。

四

「おや、銭形の」

向島で沈んだ船を見て、百本杭ぐいへ死骸を見に行つた平次は、現場でハタと三輪の万七に逢つてしまいました。

「万七兄哥、もう下手人の目星が付いたようだな」

「今度は間違いがねえつもりだ。女の怨みは恐ろしいな、銭形の、——磯屋の貫兵衛は江戸一番の醜男だが、あの弟分の菊次郎は、また苦み走った飛んだ良い男さ。お鳶はあの男に捨てられたのを七平のせいだと思ひ込んでいるんだ」

自分の手柄に脂下る万七に案内されて、ともかくも、引取手もなく、筵を掛けたままにしてある二人の死骸を見ました。

船頭の三吉は、稼業柄にもなく、水に落ちて死んだということですが、野幫間の七平の死骸には、背中から突いた傷が一つ、水に晒されて、凄まじい口を開いております。

「匕首や剃刀じゃねえ」

「出刃庖丁だよ、水船の中から拾って番所に預けてある」

万七は先に立ちました。

番所へ行つて見ると、船頭三吉の腹巻から百両の小判と^{ちあぶら}油脂の浮いた出刃庖丁と、それから、嚴重に繩を打つたままのお蔦が留め置かれております。

水船から這い上がつて、半身ぐしよ濡れのまま縛られたのでしよう、腰から下は^{なまじめ}生湿りのまま、折目も^{ぬいめ}縫目も崩れて、^{むしろ}筵の上にしょんぼり坐つたお蔦は、妙に平次の感傷をそそります。

妹のお絹によく似た^{ほそおもて}細面、化粧崩れを直す^{よし}由もありませんが、生れながらの美しさは、どんな^{きた}汚な作りをしても、^{おお}蔽う由もなかつたのでしよう。うな垂れた緑の眉から、柔かい頬のあたりが^{かす}霞んで、言いようもない痛々しい姿です。

「お前は^{ひだりき}左利きかい」

平次の最初の問いは^{とうとつ}唐突でした。

「いえ」

僅かに顔を挙げるお蔦。

「傷は右手首のようだが、——どうしてそんな怪我をしたんだ」

「自分の持った出刃庖丁で切ったのさ、解り切ったことじゃないか」
万七は苦々しく遮ります。

「右手に持った出刃庖丁で、右手首を切る筈はない」

平次のそう言う言葉に力を得たものか、

「お爛番かんぼんの卯八うさんが、碇綱いかりづなを切って投げた庖丁が当たったんです」

お鳶は顔を挙げてはつきり言うのでした。

「本人はあんな事を言うがね」

と万七。

「だが、三輪の兄哥。若い女の手で、七平を殺した上、船頭の三吉まで水の中へは投り込めないよ」

「何んの中毒か知らないが、船の中では皆んな半狂乱はんきょうらんだったそうだよ。目の昏くら

んだ人間なら、女一人の手でも、二人や三人始末出来ないことはあるまい」

万七は頑がんとしてお蔭に疑いを釘付けにするのでした。

「お蔭——お前はいま大変な事になっているよ、——皆んな申上げてしまっ
ちやどうだ、隠し立てをして、万一の事があると、母親や妹が、飛んだ嘆きを
見ることになるぜ」

「親分さん、私は、私は何んにも知りません」

平次の言葉の意味が解ると、お蔭はたださめざめと泣くのです。

「船の中で正気だったのは、磯屋とお爛番かんぼんの外には、お前一人だったと言うじや
ないか。お前は何にか知ってるに違いあるまい」

「——」

「お前の妹のお絹が、先刻俺の家へ来たよ。母親の嘆なげきを見て居られないから、
何んとか、姉を助けてくれ——と言って」

「親分さん」

お蔦は縛しばられたまま、ガバと泣き伏しました。

「言うが宜い、お前は何にか知っているに違いない」

「――」

お蔦は黙って頭を振りました。

「ね、銭形の、この通りだ」

万七は我が意を得たる顔です。

五

「親分さん方、――磯屋いそやの爺じいやが、申上げたいことがあるそうですよ」
下っ引が一人、うさんそうに鼻を持って来ました。

「卯八^うか、呼出すつもりだった。ちょうど宜い、ここへつれて来い」

「へエ——」

間もなく、下っ引に案内されて、恐る恐る膝小僧^{ひざこぞう}を揃えたのは、昨夜のお爛番——磯屋の庭掃き卯八^うでした。五十六七——一寸見^{ちよつと}は六十以上にも見えますが、長いあいだ戸外生活と労働で鍛えて、鉄のように頑丈なところがあります。

「何んだ、卯八」

万七は事件が厄介らしくなる予感で、少しばかり苦い顔を見せました。

「お蔭さんが縛られたと聞いて、びっくりして飛んで参りました。お蔭さんは、始終私か旦那の側に居りました。人を殺すなんて、飛んでもない」

「それじゃ、誰が七平や三吉を殺したんだ」

万七は乗出します。

「私ですよ、親分さん、——この卯八^うですよ」

「何？」

「三吉を川へ抛り込んだのは、この私に違いございません」

「何んだと？」

「船に仕掛けを拵えて、中流で沈めにかかったのは、あの三吉でございますよ。」

私は船底の栓を抜かせまいと思つて一生懸命組打をしました。が、何んと言つても年のせいで、三吉を川へ抛り込んだ時は、もう栓が抜かれて、水が滝のように入っていました。仕方がないから、碇綱を切つて、滅茶滅茶に岸へ漕ぎ寄せました」

卯八の言葉は予想外でした。が、これだけ筋が立っていると、もはや疑う余地もありません。

「三吉は何んだつてそんな事をしたんだ」

平次もこの恐ろしい企の意味は読みかねました。

「船の中の人間を皆殺しにするつもりだったかも知りません。碇綱で川の真ん中に止めた船が沈めば、あんなに酔って居ちゃ、助かるのが不思議です」

「皆んな気違い染みた騒ぎをしていた——とお蔭つたも言うが、何んか変なものでも呑ませたんじゃないか」

「土手どてに這い上ると、ケロリとしていたが、船の中に居る時のことは、何んにも知らないと言うぞ」

万七は畳みかけました。

「卵八は頑固がんこに口をつぐみます。

「それじゃ、七平を殺したのは誰だ」と平次。

「それはわかりません」

「お前じゃないと言うのか」

「七平は舳みよしに居りました。私やお蔦さんは艦とむにおりました」

「出刃はお前が抛ほうつて、お蔦の手に当つたそうじゃないか。その出刃で七平が殺されて居るんだぜ」

平次はその時の情景を想像している様子です。

「――」

「七平の側には誰と誰が居たんだ」

「おりんさんと、清五郎さんと、菊次郎さんと――」

「主人の貫兵衛は？」

「旦那様と、お袖さんは、私と七平さんの間に居りましたよ」

「フーム」

今度は平次が黙り込んでしまいました。

六

「八、昨夜船に乗っていた人間を、片っ端から調べ上げてくれ」

「へエ——」

「男も、女も、どんなつまらない事でも聞き漏らしちゃならねえ。七平と懇意なのや、七平に怨みや恩のあるのは、とりわけ大事だよ」

「そんな事ならわけはねえ」

「急ぐんだよ、八」

「へエ」

「それから磯屋の貫兵衛も、身上から女出入りまで、根こそぎ調べて来い、こ

いつは一番大事だ」

「心得た」

「一人で手に負えなかつたら、下つ引を二三人狩り出せ。明日の朝までだよ、八」

平次の言葉を半分聞いて、八五郎は飛出しました。

それから半日。

「親分」

八五郎はもう帰って来たのです。

「どうした、八」

「いろいろの事が判りましたよ」

「話してみな」

「お蔭つたが七平の細工さいくで、菊次郎と割かれたことは——」

「それはもう判っている」

「菊次郎は飛んだ野郎で、金と女を取込むことにかけては大変な名人ですよ」

「――」

「お蔭と手を切つて、近頃はお袖に夢中になっていますよ」

「フーム」

「兄貴の磯屋の身代を、どれだけくすねたか解りやしません。近頃磯屋の身上が歪ゆがんで、伽羅大尽きやらの貫兵衛は首も廻らないのに、菊次郎だけは、大ホクホクだ」

「磯屋がそんなに悪いのか」

「この盆ぼんは越せまいという話ですよ。何しろ十年越の駄々だ羅遊らびだ。どんなに身上があつたつてたまつたものじゃない。それに、義弟の菊次郎を始め、巴屋ともえや七平、江崎屋清五郎などは、滅茶滅茶おだに煽おだつてて費つかわせて、そのかすりを取るこ

とばかり考えているんだ」

「清五郎と七平の暮し向はどうだ」

「野^の幫^{だい}間^こを家業のようにして居るくせに近頃は大変な景気だ。ことに清五郎なんか、地所を買ったり、家を建てたり、おりんの身請けをするという話もありますよ」

「よしよし、それで大分判ったようだ。ところで、八。横山町の町役人に会って、明日の辰刻前、磯屋の主人貫兵衛が、御手当になる筈だ、万事抜かりのないように仕度をしておけ——とこう言っておいてくれ」

「それは、本当ですか、親分」

「本当とも、笹野^{ささの}の旦那には、あとでそう言っておく、——こいつは大変な捕物だ。抜^ぬかっちゃならねえ」

「あんまり早く町役人に言っておくと、磯屋の耳に入りますよ」

「それで宜いんだよ」

「へエ——」

「おツと待った、八」

「——」

「今晚、少し仕事がある。横山町の自身番へ潜り込んで、俺の行くのを待ってくれ」

「へエ——」

八五郎は何が何やら解らずに飛んで行きます。

それから二た刻ばかり、江戸の街々もすっかり寝鎮まった頃、平次は横山町の自身番を覗きました。

「八」

「あッ、親分」

「静かについて来い」

二人はそれつきり黙りこくつて、城郭じょうかくのような磯屋の裏口へ忍び寄りました。

「何をやらかすんで、親分」

「ちよいと、泥棒の真似をするんだ」

「へエ——」

「どんな事が始まって、驚くなよ、八」

「——」

平次の調子の物々しさに、八五郎もツイ胴どうぶるいが出るのでした。

「この堀へいへ飛付けるだろう」

「大丈夫ですか、親分は」

「大丈夫だとも」

二人は裏口の側の天水桶てんすいおけを踏台ふみだいにして、あまり苦勞もせずせに堀を乗り越えま

した。

「どうするんで、親分」

「シッ」

「驚いたなア」

「驚くのはこれからだよ」

磯屋の裏をグルリと一と廻り、平次は家の中へ忍び込めそうな場所を探^{さが}す様子でしたが、伽羅大尽と言われた構えだけに、さすがに忍び込む場所もありません。

「親分、あれは？」

「シッ」

平次は八五郎を突飛ばすように、あわてて物蔭^{ものかげ}に身を潜^{ひそ}めました。裏口が静かに開いて、真っ黒なものが、そろりと外へ出たのです。

二人は呼吸を殺して見詰めました。

真つ黒な人間は、しばらく外の様子を見ている様子でしたが、誰も見とがめる者がないと判ると、引っ返して家の中から手燭を持って来ました。

磯屋の主人、伽羅大尽の貫兵衛です。

貫兵衛は平次と八五郎には気が付かなかつたものか、その前を通り抜けて、物置の方へ足音を忍ばせます。

「来い」

平次は八五郎を小手招ぎながら、静かにその後をつけました。

やがて物置から、プーンとキナ臭い匂い、パチパチと物のはぜる音。

「八、大変だ。あの火を消せ」

「応ッ」

二人が一团になつて飛込むと、磯屋貫兵衛は、手燭の火を、物置の中のガラクタに移している最中だったので。

「野郎ッ」

遮しや二無む二飛込むガラッ八。

「あッ」

燃え草の火の中に、貫兵衛と組んだまま転がり込みました。咄嗟とつさの間に平次は、物置の側にある井戸に飛突くと、幸いそこにあつた用心水を一杯、燃え上がったばかりの焰ほのおの上へ遠慮会釈もなく、ドツと浴びせたのです。

「わッ、ブルブル」

火は消えました。が、ガラッ八と貫兵衛は、取っ組んだままズブ濡れになつて、物置の口へ転がり出ます。

「何んという馬鹿なことをするんだ。御府内ごふないの火付けは、火焙りひあぶりだぞ」

平次はそれを闇の中に迎えて叱咤しったします。

「相済みません」

相手の素姓すじょうも判りませんが、貫兵衛は威圧いあつされて、思わず大地に崩くずれました。

「幸い誰も気が付かない様子だ、——酒へ毒を入れたり、物置へ火をつけたり、
一体これはどうした事だ」

「——」

「俺は神田の平次だ、話して見ちゃどうだ」

平次の声は威圧から哀憐あいにんに変わっておりました。

「銭形の親分——良い方に見付かりました。皆んな申し上げます。この私が、今
晩死ななければならぬわけ——」

七

物置の前から奥の一と間に案内されて、平次とガラッ八は、磯屋貫兵衛の不思議な懺悔話さんげばなしに耳を傾けました。

「聴いて下さい、親分。この世の中に、私ほど幸せしあわに生れて、私ほど不幸せになつた者があるでしょうか」

磯屋貫兵衛の話はこうでした。貫兵衛が父の跡を継いだのは十年前、ちょうど二十五の歳、金持のお坊っちゃんに育つて、阿諛あゆと諂佞てんねいに取巻かれ、人を見み下くだしてばかり来た貫兵衛は、自分の世帯になつて、世の中に正面から打つかつた時、初めて、自分の才能、容貌ようぼう、魅力みりよく——等に対する、恐ろしい幻滅を感じさせられたのです。

それまで、自分ほど賢い者は、江戸中にもあるまいと思つたのが、我儘な坊っちゃんつの言い募つる言葉に屈従くつじゆうする人達の姿であり、自分ほど立派な男はあるま

いと信じさせたのは、おべつかを忠義と心得た、卑怯な人達のお世辞を、鏡と没交渉に信じていたに過ぎないことを、つくづくと思い当らせられる時が来たのでした。

貫兵衛は、恐ろしい失望と自棄に、氣違い染みた心持になりましたが、間もなく、何万両という大身代が自分の自由になったことと、その何万両を散じさえすれば、お坊っちゃん時代の夢を、苦もなく再現することの出来ることに、気が付いたのです。

あらゆるお世辞、——齒の浮くような阿諛を、法外な金で買って、貫兵衛は溜飲を下げました。色街の女達も、百人が九十人まで、小判をバラ撒きさえすれば、助六のように自分を大事にしてくれます。

行くところ、煙管の雨は降りました。家へ帰ると、女達の手紙を、使い屋が何十本となく持って来てくれました。やがて、金の力の宏大なのに陶醉して、

貫兵衛はもう一度、それが自分に備わった才能、徳望のように思い込んでしまつたのです。

それから十年の間、貫兵衛はあらゆる狂態をし尽しました。女房を迎える暇もないような、忙しい遊蕩——そんな出鱈目な遊びの揚句は、世間並みな最後の幕へ押し流されて来たのです。

手っ取り早く言えば、磯屋にはもう一両の金も無くなつて居たのです。家も、屋敷も、商品も、二重にも三重にも抵当に入つて、この盆には、素裸で抛り出されるか、首でも縊るより外に、貫兵衛の行く場所はなかつたのでした。

「そうになると、女共は皆んな私から離れてしまいました。お蔭も、おりんも、お紋も、お袖も——、それから私を十年越し喰い物にしていた遊び仲間も、陰へ廻つて私の悪口を言うようになりました。何千両となく取込んだ義弟の菊次郎も、巴屋の七平も、江崎屋の清五郎も、私の顔を見て、近頃はもう昔のよう

にお世辞笑いをしなくなつたばかりでなく、わざと私に聞えるように、私の悪口をさえ言うようになったのです」

貫兵衛の話の馬鹿馬鹿しさ、ガラツ八の八五郎さえ、我慢がなり兼ねて時々膝を叩きますが、銭形平次は世にも神妙に構えて、

「それから」

静かに次を促うながします。

「私は一期ごの思い出に皆んなを馬鹿にしてやろうと思ひました。昔金に飽あかして手に入れた、笑い茸わらだけの粉を、和蘭渡りの赤酒おらんだわたに入れて、皆んなに一杯ずつ呑ませ、あらん限りの馬鹿な顔をさせて見るつもりだったのです」

話は次第にその晩の筋になつて来ます。

「涼み船を出して、首尾よく笑い茸の酒を呑ませ、皆んなの、あらゆる馬鹿な姿を眺めました。それがせめてもの——翌る日は死んで行く私の腹癒はらいせだった

のです。その晩帰ると、奉公人に皆んな暇を出し、この家に火をつけて、私は首でも縊くるつもりでした。——それが、船を沈しずめられたり、七平が殺されたり、あんな思いも寄らぬ騒さわぎになってしまったのです。私の死ぬのは、そのお蔭で一晚遅もれました——尤もも」

「尤も、卯八だけは私の心持をようく知って居りました。あればかりは、私におべつかも使わず、お世辞らしい事も言いませんが、こんな落目になっても、一生懸命、私を庇かばってくれました。——笑い茸たくらの企たくらみなども、最初はたつて止めました。命に別条べつじょうのないことだからと説せつきふせられて、私に一世一代の溜飲りゅういんを下くだげさせたのです」

「船を沈めさせたのは誰の指図しずだ」

平次はそれを知りたかったのです。

「それは知りません。——私は自分の命さえ捨てるつもりでした。今さら嘘うそも偽りいつわもありません。船頭の三吉に、船を沈めることを言い付けたのだけは、この私じゃない」

「すると?」

「第一、私にはもう、百両という小判がありませんよ」

貫兵衛はそう言つて淋しく笑うのです。三吉の死体の腹巻にあつた金の事でしよう。

八

「親分、驚いたね」

ガラツ八は、黙々として横山町から帰る平次に声を掛けました。磯屋貫兵衛

を町役人に預けて、さてこれから何うしようもなく、家路を辿たどつていたのです。

「俺も驚いたよ。七平を殺したのは、お蔭や貫兵衛でない事は確たしかだ」

「三吉に言い付けて、船を沈めさせた奴じゃありませんか」

「えらいッ、八、其処へ何んだって気が付かなくなったんだ。あの晩、赤酒を呑む振りをして呑まなかつた奴と、泳およぎのうまい奴を調べて来い、——こんどは間違まちがいないぞ」

「そんな事ならわけはありませんや」

「何処へ行つて聞くつもりだ」

「船宿を軒並叩き起して——」

「それも宜いが、卯う八とお蔭に聞くのが早いぜ」

「心得た」

ガラッ八は闇の中に飛びます。翌る朝ガラッ八が、その報告を持って来たの

は、まだ薄暗いうちでした。

「親分、驚いたの何んの」

「どうした、八」

「あの中で泳げないのは、貫兵衛と爺やの卯八だけですよ」

「何？」

「死んだ七平なんぞと来た日にゃ、河童かっぱ見たいなもので」

「菊次郎と清五郎は？」

「二人ともよく泳ぐそうですよ、——尤もっとも女どもは皆んな徳利とっくりだ、少しでも泳げそうなのは、橋場はしばで育ったお袖そでくらいのもので」

「すると——面白いことになるぜ。七平は船が沈んでも死そに相そうもないから刺さされたというわけだろう」

「其処そこですよ、親分」

ガラッ八は大きな声を出します。

「ところで、赤酒を呑まないのは、誰と誰だ」

「そいつが大笑い、親分」

ガラッ八はクスリクスリと笑います。

「何が可笑しい」

「あの伽羅大尽きやらだいじんの貧乏大尽がどこまでお目出度たいか解らない」

「どうしたんだ」

「赤酒の中に、何んか仕掛けがあると知って、たった一人も呑んだ奴がないと

聞いたらどうします」

「本当か、それは、八？」

この情報には、さすがの平次も驚きました。

「どうかしたら、殺された七平くらいは呑んだかも知れないが、菊次郎も清五

郎も、おりんも、お袖も呑んじゃ居ません。皆んな川に捨てたり、手拭てぬぐいにしめしたりしたそうで——これは最初から素面しらふだったお蔭と卯八が見届けています。尤ももつと三吉は確たしかに呑んだそうで」

「成程な」

「笑わらい茸だけなんて、そんなものを吞ませて、万一間違いがあつてはと、人の良い卯八がそつと菊次郎に耳打をしたんです」

「そいつは大笑いだ、——吞まない毒酒を呑んだ振りをして、六人揃そろつて氣違きぢがい踊りと馬鹿笑ばかいをするとはふざけたものだな、伽羅大きゃらだいじん尽じんの馬鹿納ばかめには、なる程そいつは良い狂言きやうげんだ」

「ところで下手人げしゅにんは誰たれでしょう、親分おやぶん」

「解とつて居るじゃないか」

「へエ？」

「皆んなだよ」

平次は八五郎と一緒に、まず磯屋の近所に住んでいる菊次郎を襲おそいました。猛烈に暴れるのを縛って、つづいて江崎屋の清五郎を、それから——年増芸者のおりんとお袖とを、四人数珠じゅず繋ぎにして、その朝のうちに送ってしまったのです。

×

×

「さア判らねえ、下手人は四人ですかい、親分」

「その通りだよ。菊次郎が頭領かしらになって、この十年の間に、磯屋の身代を滅茶滅茶にし、その半分位は自分達が取込んでいたんだ」

「そいつは世間でも知っていますよ」

「いよいよ磯屋が身代限りということになると、お白洲しらすへ出るから、自分達の悪事がみんな知れる、——涼み船で笑い茸を吞ませるといふ話を卯八から聴い

て、菊次郎と清五郎は、その裏を掻く相談をしたんだ。船頭の三吉に百両の大金をやつて、河の真ん中で船を沈めさせ、貫兵衛とお蔦と卯八を、溺れさせ、自分たちだけ助かるつもりだったのが、その場になって七平が不承知を言い出して、仲間割れが出来て一寸困ったところへ、船頭の三吉は本当に毒酒を呑んで、卯八のような年寄に川へ抛り込まれた」

「へエ——」

「卯八の抛つた出刃庖丁ではぼうちようを拾つたのは、一番近いところにいたお袖そでだ。お袖の手から菊次郎が受取り、これを清五郎に渡した。清五郎がそいつで舳みよしに後ろ向になつている七平を突き、川の中へ落したんだろう。ただ川の中へ突落した位じゃ、泳およぎのうまい七平は死なない——七平に寝返りを打たれちゃ菊次郎も清五郎も首が危ない」

「なアる——」

「そんな事をしていゝうちに船は岸に着いた。人立ちがして来たから、その上の細工は出来なかつたのだらう」

そう説明されて見ると疑う余地もありません。四人——七平を加えて五人でやった細工なら、なるほど手際よく運びもするでしょうが、最後の際きわに、七平の裏切と卯八の忠義で、悪者どもの企たくらみが喰い違ちがつてしまつたのです。

「悪い奴らじゃありませんか。親分」

「人間の屑くずだよ、——俺の立てた筋すじはまず間違まちがひはあるまいと思う。このお調べは面白いぜ、八」

「へエ——」

「気の毒なのは磯屋の貫兵衛だ、——が、自業自得じごうじとくというものさ、——それよりも可哀想なのはお蔭つただ」

平次はつくづくそう言うのでした。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

底本では男女の数を「七人」としていますが、文意および嶋中文庫版「銭形平次捕物控」の表記にしたがって「六人」に改めました。

挿絵―萩 柚月

笑い茸

初出―「オール讀物」昭和十四年八月号 文藝春秋社

底本——「銭形平次捕物全集」第五卷 河出書房 昭和三十一年七月十五日初版

編集・発行 銭形倶楽部



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>